



国立民族学博物館 友の会ニュース

MINPAKU ASSOCIATES NEWSLETTER

No.245

2018.7 ▶ 8

「国立民族学博物館友の会」は「みんぱく（国立民族学博物館）」の活動を支援し、博物館を楽しく、積極的に活用するためにつくられました。

発行日 2018 年 7 月 1 日
編集・発行 一般財団法人千里文化財団

国立民族学博物館は 当分の間、臨時休館いたします。

《延期もしくは中止が決定している催し》

■みんぱく

- ・企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて
—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと—」
- ・企画展関連の催し 各種
- ・7/21（土）みんぱくゼミナール（講師：鈴木七美）
- ・7/1（日）、7/8（日）、7/15（日）、7/22（日）、
7/29（日）みんぱくウィークエンド・サロン

■友の会

- ・7/7（土）友の会講演会（講師：三尾稔）
- ・8/4（土）友の会講演会（講師：踊共二）

※ 8 月以降の予定は、みんぱく、友の会のプログラム
ともに、休館期間が確定次第ご案内いたします。

※ 8 月に開催する第 91 回民族学研修の旅（訪問先：モンゴル）、第 79 回体験セミナー（訪問先：富士山）は、
変更なく実施いたします。

このたび、六月一八日（月）に発生した大阪府北部を震源とする地震により、被害を受けられた友の会会員のみなさまに、心からお見舞いを申しあげます。
この地震の影響により、みんぱくは当分の間、臨時休館をすることになりました。それに伴い、企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと—」の開催を延期するとともに、しばらくは館内で実施する催しの中止が決定しています。詳細につきましては、決まり次第順次、みんぱくホームページにてご案内いたします。また、友の会の催しも、当面は館外で開催するプログラムのみを実施いたします。休館に際しましては、会員のみなさまのご理解・ご協力をたまりたく、お願いいたします。
友の会事務局は通常どおり業務をいたしております。お手元に郵便物が届かない、もしくは送付先の変更等のご連絡は、事務局までお申し出ください。

謹んで震災のお見舞いを申しあげます

国立民族学博物館友の会

国立民族学博物館友の会は、国立民族学博物館並びに文化人類学・民族学の普及を目的とし、国立民族学博物館と市民のあいだのかけはしとして発足し、国立民族学博物館の活動を支援しています。ご利用にあわせて、各種サービスをご用意しております。

○博物館活動を支援する

- ・維持会員
- ・正会員
- ・家族会員

○博物館を活用する

- ・ミュージアム会員
- ・みんぱくフリーパス

○学校・学部単位でも ご入会いただけます。

- ・キャンパスメンバーズ



ご希望の方には入会案内をお届けします。詳しくは、友の会ホームページ、または友の会事務局までお問い合わせください。

神さまのいる日常

三尾先生に
きく！

北西インドで 「生きている宗教」に出会う



土地を知り、文化に魅了された研究者が同行する「民族学研修の旅」。第92回は、雨季明けにおこなわれるヒンドゥー教祭礼の期間にあわせて、インド北西部の史跡や宗教施設を訪ねます。同行講師の三尾稔先生にお話をうかがいました。

——三尾先生はインド北西部のラージャスタン州を調査地に、宗教について研究をされています。インド、そして宗教に関心をもたれた経緯を教えてください。

わたしが学生のころは、日本では、文化人類学の分野でインドを研究する人があまりいなかったんです。当時はどちらかというと、文字をもたないような、いわゆる「未開の地」が調査地として好まれました。一方でわたしは、長い歴史のなかで文化が育まれた場所を調査したかった。それがインドを選んだきっかけです。

当初は宗教に限らず「さまざまな人が混在する場所ではどう生きるのか」ということに関心がありました。それが繰り返してインドに足を運ぶなかで、人びとの日常に頻繁に神さまが現れることに気づき、とても不思議に感じました。出会ったことのない生活のあり方を知り、宗教に興味を持ちました。宗教はインドの人びとにとって、生きている意味を裏打ちするもの、下支えするものです。暮らし方や価値観を知ることがとても大切。だから知りたいと思いました。

——なぜ、北西部なのでしょう。

北西部はいろんな宗教が対立し、ときに融合しながら長い時間をかけて共存の知恵を培ってきた土地です。イスラーム勢力が強い影響を及ぼしてきたし、一方でジャイナ教の伝統も強いのこっている。また、ラージャスタン州には独立まで多くの藩王国が存続し、イギリスの直接統治を受けてこなかったで、欧米の研究者もあまり足を踏み入れていなかった。だからこそ自分が

調査したいと思いました。

——第92回民族学研修の旅では、そんなインド北西部にご案内いただきます。

宗教というと、とかく分断して住み分けている、争いの種になると考えられがちですが、それはひとつの側面です。互いの信仰を受け入れ、ときには取り入れながら共存する姿を各所でみることができるといいます。

訪問先を例にすると、例えば、ムガル朝の三代皇帝アクバルは、イスラーム以外の宗教にも寛容な人物でした。イスラームとヒンドゥーの融合を推し進めようとした彼の理想を、都市遺跡ファテール・スィークリーにみることが出来ます。また、カパーサン町のスーフィー聖者廟は、改宗することなくその聖者の弟子となったヒンドゥー教徒によって建てられました。ヒンドゥー教では本来、火葬し川に流して死者を弔いますが、聖者廟の近くにはその弟子の墓もあります。

当初は不思議に感じたインドの人びとの宗教との向き合い方ですが、いまは体現の仕方の違いだったんだと感ずるようになりました。信じること、願うこと、それ自体が宗教です。わたしたちも折々に願掛けをしたり、先祖を想ったりしますよね。生活に宗教がしっかりと根づいている。その一方で経済発展も進行している。それが現在のインドです。

研修の旅では、インド北西部の歴史的な背景も踏まえて、いま「生きている宗教」を実感してもらえればと思います。



カパーサン町のスーフィー聖者廟。聖者の昇天を記念する祭礼の日に訪ねる（提供：三尾稔）

第92回民族学研修の旅

融合と共存の北西インドをゆく

女神信仰とインド叙事詩の祭礼の期間に訪ねる

講師：三尾 稔（民博教授）

期間：10月13日（土）～10月22日（月）

参加費：335,000円（他、燃油サーチャージ等諸経費がかかります）

訪問先：デリー、アーグラ、ウダイプル他

申込締切日：8月31日（金）

関心をお持ちの方には、旅程を記載したチラシを郵送します。

●関連講演会の中止のご案内●

7月7日（土）に予定しておりました、第479回友の会講演会「ヒンドゥー教祭礼の読み解き方」は地震の影響で中止とさせていただきます。ご迷惑をおかけしますことを、お詫び申し上げます。

講師：佐藤 浩司（民博准教授）

期間：2018年3月10日（土）～18日（日）

インドネシア、ニアス島とスマトラ島北部の住まいを訪ねる



③勇猛な戦士を育んだ南ニアスでは勇者の証に巨石跳びをおこなう。跳躍用の石積み台は高さ2m程度。子どもたちは遊びのなかで技を磨く

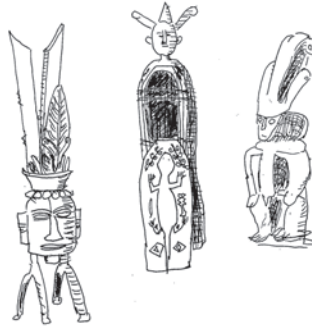
一万を超える島々に二〇〇以上の民族が暮らすインドネシア。ここでは島ごと、民族ごとに異なる個性豊かな木造家屋が生み出されてきました。インドネシアの家屋や集落には、配置や方位、装飾やシンボリックな形状などに人びとの世界観をみることができま。一方でこうした伝統家屋は、現在の暮らしに照らし合わせると利便性に乏しいことも多く、家の住み手や作り手が途絶え、あるいは文化財として保護する目的ばかりが先行して住民不在となる例が多くみられます。第九〇回民族学研修の旅では、人びとが実際にそこで生活を営む「住まい」として機能している伝統家屋・伝統集落を求めて、ニアス島とスマトラ島北部を訪ねました。



①北ニアスの家屋。ニアス島では南部北部ともに、道に面した壁面に窓があり、屋内窓際にはベンチが設けられている



④高さ20mに達するパウオマルオ村のオモセパ（左）はインドネシア最大の木造家屋



ニアス島文化遺産博物館におさめられた文化財



②2005年の津波災害のあとに JICA の支援によってできた市場。魚が豊富

■写真
猪股玲子さん、佐藤善秀さん、高田真理さん
中坪功雄さん、事務局
■スケッチ
相田道行さん

【行程】

■3月10日（土）

出国。インドネシアの首都ジャカルタで乗り継ぎ、スマトラ島メダンへ。

■3月11日（日）

早朝、空路ニアス島へ移動。上空から噴煙たなびくシナパン山火口を望む。到着後北部の集落へ。ニアス島は南北で文化が異なり、家屋や集落形態にもそれが顕著。北部では大規模な集落を形成するような社会制度が発達せず、現在、住居は道沿いに点在する。家屋は楕円形平面の高床建築で、床下には斜材が組まれている。村人の家にお邪魔し、豚肉とシリールピナン（噛みタバコ）を味見。その後、讃美歌の響く街の市場へ。午後、ニアス島文化遺産博物館を見学。ニアス島の民俗文化財の散逸を惜しんだドイツ人修道士の収集品を基盤に、武器や墓標、家屋模型などが展示されている。石彫や木彫に島内で育まれた優れた彫刻技術を実感。夕方、ニアス島南部へ。①

■3月12日（月）

朝、JICAの支援でできた市場を見学。その後終日、南部の六集落をめぐる。集権的な社会制度が発達した南部では、計画的な大規模集落が生まれた。いずれの集落も川下から川上に向かって走る石畳の道を挟んで家屋が軒を連ねる。矩形平面の高床建築の家屋は二棟一組になっており、棟と棟の間にそれぞれ入口をもつが、反対側の壁面にも扉があるため、集落全体で屋内を行き来できるというユニークな構造。どの集落でも道に穀物や洗濯物が広げられ、子どもたちの遊ぶ姿が目にとまる。南ニアス最大規模のパウオマルオ村で夕食に家庭料理をいただく。希望者は一般家庭に宿、集落の居酒屋でヤシ酒を楽しんだ。②③

■3月13日（火）

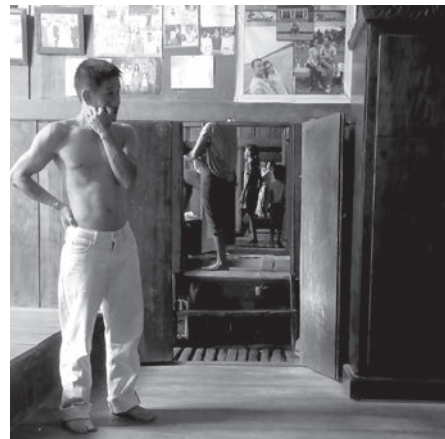
午前中パウオマルオ村で過ごす。朝、昼食にいただく儀礼食の準備を見学。切り分けた豚肉は立場によって供する部位が決まっている。昼食までの時間、オモセパ（首長の家）、バレ（集会所）を見学したのち、民俗舞踊と伝統的な石跳び（勇気ある者の証。各集落にひとつずつ石積み



⑧カロ・バタック人の住むドカン村の家屋（屋内）。4つの囲炉裏が設けられ、8家族が共に暮らす



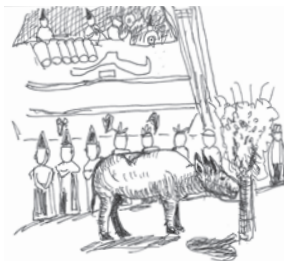
⑤オモセブアの内壁に施された彫刻。ニース島では巨石記念物や家屋の柱、壁面に見事な彫刻を見かける



⑥南ニースの家屋は扉を開けると集落全体の行き来ができる。ニース島の家屋には窓があるため明るく住みやすい



⑦鞍型屋根のトバ・バタックの家屋



バタック人の踊り。ポロタンとよばれる棒に繋がれた、水牛を囲んで踊る



⑨ドカン村の家屋。壁面を囲う模様はヤモリを表している



⑩賑わいを見せる屋台街

参加者の感想

住まいとして機能している伝統建築を、外観だけでなく、内部まで見る事ができ、さらにそこで暮らす人たちとともに過ごした経験は大変貴重で価値あるものでした。南ニースでは目の前の自然から得た新鮮な食物を食べ、たくさんの輝かしい笑顔の子どもたちと遊び、カロ・バタックの村では大家族で支え合いながら暮らす人たちに会いました。人間にとっての本当の豊かさを考えさせられる旅でした。（渡邊友二さん）

小学生の頃に読んだ学習雑誌に、インドネシアの戦前から独立を舞台にした日本人の物語がありました。子どもの頃の興味が募り、ついにニース島まで来ました。カロ・バタックのお宅では旧日本軍で働いていたおじいさんが日本の唄を歌ってくれました。子どもの頃の経験はすごいです。この旅で出会ったインドネシアの子どもたちに、私たちとの出会いがよい記憶としてのこるよう、自分もまた笑顔でいたいと思いました。（本間直子さん）

帰国。

■ 3月18日（日）

朝、植民地時代の建物がのこるコタ地区を散策したのち、市内のデパートで買い物。昼食後、国内各地の伝統家屋を模したパビリオンが並ぶタマン・ミニを見学。旅行中初めての雨。夕食後、ジャカルタ郊外の空港へ。

■ 3月17日（土）

朝、植民地時代の建物がのこるコタ地区を散策したのち、市内のデパートで買い物。昼食後、国内各地の伝統家屋を模したパビリオンが並ぶタマン・ミニを見学。旅行中初めての雨。夕食後、ジャカルタ郊外の空港へ。

■ 3月16日（金）

フルーツマーケットに立ち寄ったのち、メダンの空港へ。途中、ドリアンをたっぷり試食。夕方、空路メダンから首都ジャカルタへ移動。夕食後、希望者で連れ立って市内の屋台街へ。これまでの滞在地とは打って変わって首都はイスラム文化圏。ノンアルコールドリンクが積極的に売られていた。⑩

■ 3月15日（木）

空路ニース島からスマトラ島へ。アブラヤシやゴムノキのプランテーションを見学しながら、世界最大のカルデラ湖・トバ湖の中央に位置するサモシル島を目指す。トバ湖はトババタック人の故地で、集落や野外博物館で鞍型屋根の伝統家屋をみる事ができる。家屋は本来穀倉と向かい合って建てられ、聖なる山の方角に向かって入口が設けられる。⑦

■ 3月14日（水）

空路ニース島からスマトラ島へ。アブラヤシやゴムノキのプランテーションを見学しながら、世界最大のカルデラ湖・トバ湖の中央に位置するサモシル島を目指す。トバ湖はトババタック人の故地で、集落や野外博物館で鞍型屋根の伝統家屋をみる事ができる。家屋は本来穀倉と向かい合って建てられ、聖なる山の方角に向かって入口が設けられる。⑦

■ 3月13日（火）

空路ニース島からスマトラ島へ。アブラヤシやゴムノキのプランテーションを見学しながら、世界最大のカルデラ湖・トバ湖の中央に位置するサモシル島を目指す。トバ湖はトババタック人の故地で、集落や野外博物館で鞍型屋根の伝統家屋をみる事ができる。家屋は本来穀倉と向かい合って建てられ、聖なる山の方角に向かって入口が設けられる。⑦

■ 3月12日（月）

空路ニース島からスマトラ島へ。アブラヤシやゴムノキのプランテーションを見学しながら、世界最大のカルデラ湖・トバ湖の中央に位置するサモシル島を目指す。トバ湖はトババタック人の故地で、集落や野外博物館で鞍型屋根の伝統家屋をみる事ができる。家屋は本来穀倉と向かい合って建てられ、聖なる山の方角に向かって入口が設けられる。⑦

【開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料」関連】

文化遺産としての日本万国博覧会
——人類の進歩と調和を再考する

鈴木 紀 (民博准教授)

日本万国博覧会(大阪万博)のテーマは「人類の進歩と調和」でした。これは、一九六五年に有識者からなるテーマ委員会によって決定されたものです。委員のあいだでは、当初科学技術の進歩がもたらす戦争や公害問題など社会の不調和を直視し、その克服に向けて英知を集めようという議論がおこなわれました。しかし次第に、不調和よりも調和を、調和よりも進歩を重視する意見が優勢となり、「人類の進歩と調和」というテーマが確定しました。

ところが一九六七年にテーマ館プロデューサーに就任した岡本太郎は、



日本万国博覧会のテーマ館。太陽の塔は大屋根を貫通していた
(写真提供:大阪府)

このテーマの楽天的な世界観に批判的でした。そのためテーマ館で「進歩」を象徴する空中の大屋根に穴を開け、「ペラボールなもの」として太陽の塔を貫通させました。人びとが装う「調和」に対しては、太陽の塔正面の「太陽の顔」で睨みをきかせ、裏面の「黒い太陽」からは冷ややかな視線を投げかけました。むしろ岡本が重視したのは「根源の世界」です。未来志向に浮かれる前に、生命の神秘と人類の創造性を讀えようという狙いから、岡本は太陽の塔の地下に、過去を表現する展示場をつくりました。

こうした経緯を踏まえると、大阪万博の遺産として継承すべきものは、第一に、現代文明へ警鐘をならし続ける太陽の塔、第二に、根源の世界を想像するために地下展示場におかれた民族資料ではないでしょうか。後者はみんぱくに収蔵され、一部は今回の特別展で展示されました。そして第三に、岡本が表現した文化批判の精神こそ、研究機関としてのみんぱくが忘れてはならない遺産だと思われれます。

【第79回体験セミナー関連／みんぱく名誉教授シリーズ】

富士山——水と世界遺産を考える

秋道 智彌 (山梨県立富士山世界遺産センター所長、民博名誉教授)

富士山は二〇一三年六月二日、第三七回世界遺産委員会において「富士山——信仰の対象と芸術の源泉」としてユネスコの世界遺産に登録決定されました。

世界遺産はユネスコにより「顕著な普遍的価値(OUV)を有するもの」と規定され、その根拠となる「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(通称、世界遺産条約)が一九七二年に採択され、一九七五年に発効しました。

普遍的な価値をもつ点に着目し、同時に富士山独自の文化的な価値について考えてみました。富士山の構成資産は二五あり、このうち富士五湖、忍野八海、白糸の滝、富士山本宮浅間大社など、水と関わりのあるサイトは半数以上に達します。

富士山に降った雨や雪は地下に浸透し、湧水として湧き出します。古代に活発であった富士山の噴火は、火口にすむ浅間大神の怒りとされ、水はその怒りを鎮めるものとされてきました。浅間大神への畏敬の念から、平安時代には浅間神社が各地に建立され、世界遺産の構成資産とな

りました。

古来より、富士山の湧水は飲料水、農業用水、工業用水として生活や産業に大きな役目を果たしてきました。富士山信仰では、富士山に登拝するさいに道者は水行により湧水で身を清めました。江戸時代には、富士山にゆかりのある八海(内八海・外八海・元八海)をめぐる巡拝がさかんにおこなわれました。湧水は富士山固有の価値をもつとともに、水をめぐる普遍的価値を有することがわかります。



忍野八海の湧池における富士山の湧水

お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつでも、どなたでもご入会いただけます。

国立民族学博物館友の会
一般財団法人 千里文化財団

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1(国立民族学博物館3階)

電話: 06-6877-8893(平日9:00~17:00) FAX: 06-6878-3716

e-mail: minpakutomo@senri-f.or.jp

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/もっと早く、もっとたくさんの情報を
手に入りたい方に

Twitter

『季刊民族学』をよりお楽しみいただける、
最新情報、見どころなどを発信します。
<https://twitter.com/KMinzokugaku>

Facebook

「友の会ニュース」では紹介しきれない友の会の催し、
刊行物などの情報を提供します。
<https://www.facebook.com/minpakutomo>